

社会福祉を専攻する学生の 介護福祉士に対するイメージの実態

The real image of the students,
who major in social welfare, for care workers

林 雅美
(Masami HAYASHI)

Abstract :

【Objective】 This study is intended what kinds of image for care workers the students ,who major in social welfare, have and how they recognize care workers' job contents.

【Method】 We conducted the oneself-style questionnaire survey for our university freshmen who study the care welfare outline subject.

【Result】 Before the students start the study subject, their images for care worker's job roles are quite vague. After their study, they have defined care worker's job roles as 'provision of services for customers based on special knowledge and skills', 'provision of unique services customer by customer' and 'leadership for care staff'.

【Conclusion】 The image of the students for care workers has changed 'their quite vague feeling' before their study' into those of 'care workers provide added-value services for customers who require daily life help while the students understand customers more detail profile and care workers' more concrete job contents.' after their study. After their study of the subject, they have begun to image care worker jobs as those based on value added expertise, while they remain negative image for care worker jobs.

キーワード：介護福祉士，役割，イメージ

Keywords : care workers, role, image

I. はじめに

日本は1960年代に入り高度経済成長を迎え、産業構造の変化や都市部への人口の集中に伴い、家族形態は大きく変化し核家族化が進んだ。それまでの日本では、高齢者の介護は家族がおこなうことが当たり前であった風潮にあったが、核家族化により高齢者を取り巻く環境が変化したことを受け、1963年に老人福祉法が制定された。1970年を迎え日本の高齢化率

は7%を超え、高齢化社会に突入した。その後も高齢化率は上昇を続け、高齢者施策が追いついていないことが問題点として挙げられた。厚生労働白書¹⁾によると1970年代になると、高齢者福祉では、寝たきり高齢者の数やその生活実態の深刻さが明らかにされ、社会福祉施設緊急整備5か年計画が作成されるなど、特別養護老人ホームを中心に、量的な整備が徐々に図られてきたとあり、特別養護老人ホームをはじめとす

る高齢者施設の拡充と量的整備が進められた。このころの高齢者施設では、寮母と呼ばれる職種が介護をしていたが、資格などの規定はなく、専門知識や技術を習得した上で仕事にあたっていただけではなかった。しかし急速な高齢化にともない介護を必要とする高齢者のニーズが多様化したことから、介護を担う人材の資質向上が問題視された。それに伴い1987年に社会福祉士法及び介護福祉士法が制定され、介護福祉士が誕生した。

団塊の世代が全て75歳以上となる2025年には、後期高齢者は2000万人を超えるとされており、それに伴い要介護高齢者が増大することは予測されており、介護を担う人材が30万人不足すると見込まれている。このような状況下において、国は介護人材を、量・質ともに安定的に確保するための道筋を示すことを喫緊の課題とし、総合的に取り組むとしている。社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門員会は、介護人材確保の具体的な方策として「『参入促進』『労働環境・処遇の改善』『資質の向上』に資する対策を、地域の実情に応じて、総合的・計画的に進める」²⁾と報告している。この中の参入促進においては、「多様な人材層に対し、介護職への理解促進とイメージアップを推進し、参入促進を図ることは、目下の緊急課題であり、介護の社会的評価の向上に重点を置いた取組を進めるとともに、適切な効果検証を行うべきである」²⁾と示し、2025年に向けて介護人材の量と質を安定的に確保するための取り組みを図っている。しかしながら、社会における介護に対するイメージが改善されているとは言えない。2010年に内閣府が実施した介護保険制度に関する世論調査³⁾によると、介護職に対するイメージに近いものはどれか聞かれたところ「夜勤などがあり、きつい仕事(65.1%)」、「給与水準が低い仕事(54.8%)」という回答が多かった。また2019年に株式会社リクルートキャリアが報告している介護職非従事者の意識調査⁴⁾によると、介護職非従事者が就業をためらう理由に「体力的にきつい仕事の多い業界だと思ふから(49.8%)」、「精神的にきつい仕事の多い業界だと思ふから(41.8%)」、「給与水準が低めの業界だと思ふから(31.2%)」など、「仕事がき

つい」「給与水準が低い」といったネガティブイメージが変わらず定着している状況にあることが伺える。介護の実態において、介護労働安定センターによる「令和2年度『介護労働実態調査』」⁵⁾によると、介護2職種(訪問介護員、介護職員)の離職率は14.9%と全産業の平均離職率15.6%を0.7ポイント下回っている。また、介護技術の進化によって腰などを痛めず、身体負荷をかけず生涯働ける環境になっていることが認知されていない。所定内賃金や賞与についても、年々増加傾向で推移しており、労働環境においては、人手が足りていないと感じてはいるものの、労働条件・仕事の負担について特に悩み、不安、不満等は感じていないと回答しているものが増加していることから、介護従事者と介護非従事者における介護のイメージは乖離しているのが現状である。

介護は、高齢者を対象とした在宅介護や施設介護もあるが、障害のある方や若年者や児童などを対象に支援することもある。そのため対象によりニーズも違い、求められる支援内容も違ってくる。介護では支援方法や支援技術は多様であるという特性を持っている。しかしながら、一般的な介護のイメージは高齢者のみを対象としたものであり、おむつ交換や食事の世話といった、自己流でも対応できると捉えられている。そのため、介護が専門性の高い職業であるといった認識に繋がりがづらいと考える。介護職に対するイメージは、社会的にはよくない認識が定着している状況にある。林⁶⁾は、介護の仕事については、人の役に立ち、社会への必要性が高く、働き甲斐のあるポジティブなイメージを持っていても、メディア等からの表面的なネガティブな情報の方が強い印象となっていると報告している。また、津田⁷⁾は、介護に対する社会的イメージが悪く、入学前の説明では、保護者から介護は厳しいからと、マイナスイメージで介護を受け止めている話を聞くことや、介護コースからコース変更を希望する学生、将来介護職には就きたくない并希望する学生もいると述べている。このように将来社会福祉の仕事に就くことを志望している学生であっても、介護に対してはネガティブなイメージを持っているケースもあると考えられる。また、

介護福祉士の役割や仕事内容について正しく認識していない可能もある。このことから、本研究では、社会福祉を専攻している学生が、介護福祉士についてどのようなイメージを持っているのか、仕事内容をどのように捉えているのかを明らかにする。また、同時に介護福祉概論科目の履修後に介護福祉士のイメージや仕事内容について、認識が変化するのかも明らかにする。

Ⅱ. 研究方法

1. 対象

社会福祉を学ぶ学科のある私立A大学において、介護福祉概論科目を履修している大学1年生を対象とし、全15回の授業の受講前と受講後で2回の調査を行った。1回目と2回目の調査に回答した53名（男性25名、女性28名）を分析対象とした。1回目の調査は第1回の授業が始まる前の2021年4月に実施した。2回目の調査は第15回の授業が終了した2021年7月に実施した。

2. 調査内容

介護福祉士についてどのようなイメージを持ち、どのような仕事内容と認識しているのか、キーワードを抽出するため、自記式アンケート調査を実施した。調査項目は、①介護福祉士についてどのようなイメージを持っているのか、②介護福祉士の仕事内容についてどのようなイメージを持っているのか、2項目について自由記述で回答を得た。

3. 分析方法

質問紙調査により回収したデータは、単純集計で全体の状況を分析した。また自由記述の内容は、一内容を一項目として記録単位とした。その記録単位を意味付けられるまとまりでコード化した。そして類似性によりカテゴリ化し、介護福祉士についてのイメージ、介護福祉士の仕事内容についてのイメージを明らかにした。解析や分析内容は専門家2名のスーパービジョンを受け繰り返し検討を重ねた。

4. 倫理的配慮

任意の調査であること、調査に協力しない場

合でも一切の不利益はないこと、授業の成績等とは一切の関係がないこと、無記名で個人情報収集しないこと等を依頼文に明記した。また調査票に、同意のチェック欄を設け、提出をもって同意を確認した。

Ⅲ. 結果

1. 基本特性

対象者61名に対し、回収した57名（93.4%）の質問紙のうち、分析する項目に欠損のあるものを除いた53名（有効回答率：92.9%）を解析対象者とした。対象者の性別について、男性25名（47.2%）、女性28名（52.8%）であった。

2. 介護福祉士のイメージについて

介護福祉士のイメージについての質問に関する結果を表1に示す。第1回の受講前の回答において、「抽象的なイメージ」内容で回答しているものが10名（18.9%）、「役割」で回答しているものが43名（81.1%）であった。抽象的なイメージで回答しているものの内訳は、「ポジティブイメージ」内容が6名（60%）、「ネガティブイメージ」内容が2名（20.0%）、「どちらにも該当しない」回答が2名（20.0%）であった。また、役割で回答している内訳は、「支援する」イメージが21名（48.8%）、「介護する」イメージが14名（32.6%）、「介助する」イメージが2名（4.7%）、「リハビリをする」イメージが2名（4.7%）、その他が4名（9.3%）であった。そして、全15回の授業を受講し終えた後の回答では、「抽象的なイメージ」内容で回答しているものは8名（15.1%）、「抽象的なイメージと役割の両方」で回答しているものが11名（20.8%）、「役割」で回答しているものが34名（64.2%）であった。抽象的なイメージで回答しているものの内訳は、「ポジティブイメージ」内容が7名（87.5%）、「どちらにも該当しない」回答が1名（12.5%）であった。抽象的なイメージと役割の両方で回答したものの内訳は、「ネガティブイメージ」内容が6名（54.5%）、「ポジティブイメージ」内容が5名（45.5%）であった。役割で回答している内訳は、「支援する」イメージが24名（54.5%）、「専門性」イメージが8名（18.2%）、「介護する」

表1 「介護福祉士」のイメージについて

受講前の回答		受講終了後の回答	
介護福祉士のイメージを抽象的に回答している	10 18.9%	介護福祉士のイメージを抽象的に回答している	8 15.1%
抽象的なポジティブイメージのみ明記している	6 60.0%	抽象的なネガティブイメージのみ明記している	7 87.5%
抽象的なネガティブイメージのみ明記している	2 20.0%	抽象的なイメージのみ	1 12.5%
抽象的なイメージのみ	2 20.0%	介護福祉士のイメージを役割と抽象的の両方で回答している	11 20.8%
		仕事の役割とネガティブイメージ	6 54.5%
		仕事の役割とポジティブイメージ	5 45.5%
介護福祉士のイメージを役割で回答している	43 81.1%	介護福祉士のイメージを役割で回答している (複数回答あり)	34(44) 64.2%
支援する	21 48.8%	支援する	24 54.5%
生活の支援をするイメージ	8 18.6%	生活を支援する	10 22.7%
サポートするイメージ	7 16.3%	支援する	5 11.4%
支援をするイメージ	4 9.3%	直接的な支援をする	4 9.1%
肉体的に人を支えるイメージ	2 4.7%	その人にあった支援をする	3 6.8%
介護をする	14 32.6%	自立を支援する	2 4.5%
介護をするイメージ	11 25.6%	専門性	8 18.2%
ケアをするイメージ	1 2.3%	専門性を問われる仕事	7 15.9%
生活の介護をするイメージ	1 2.3%	医療的観点からも支援する	1 2.3%
介助する	2 4.7%	介護をする	4 9.1%
介助をするイメージ	1 2.3%	介護する	3 6.8%
直接的なケア・介助をするイメージ	1 2.3%	ニーズに沿った介護をする	1 2.3%
リハビリをする	2 4.7%	人と関わる	3 6.8%
リハビリをするイメージ	1 2.3%	人と関わる仕事	2 4.5%
リハビリや生活の介護をするイメージ	1 2.3%	寄り添う	1 2.3%
その他	4 9.3%	その他	5 11.4%
寄り添うイメージ	2 4.7%	日常生活の問題を解決する	1 2.3%
世話をするイメージ	1 2.3%	相談に応じる	1 2.3%
対応をするイメージ	1 2.3%	連携が求められる	1 2.3%
手伝うイメージ	1 2.3%	精神的ケアをする	1 2.3%
		気持ちに応える	1 2.3%

表2 介護対象者のイメージの有無について

受講前の回答		受講終了後の回答	
対象者についてイメージしていない	18 34.0%	対象者についてイメージしていない	19 35.2%
対象者についてイメージしている	35 66.0%	対象者についてイメージしている	34 63.0%
高齢者	11 31.4%	高齢者	15 44.1%
高齢者および障害者	9 25.7%	利用者	5 14.7%
介護を必要としている人	5 14.3%	日常生活に支障のある人	5 14.7%
生活に支障のある人	5 14.3%	介護を必要としている人	3 8.8%
身体に支障のある人	3 8.6%	身体に支障のある人	3 8.8%
高齢者および認知症の人	1 2.9%	障害者	3 8.8%
支援が必要な人	1 2.9%		

イメージが4名(9.1%)、「人と関わる」イメージが3名(6.8%)、その他が5名(11.4%)であった。

3. 介護対象者のイメージの有無について

介護対象者のイメージについては表2に示す。第1回の受講前の回答において、「対象者についてイメージしていない」ものは18名(34.0%)、「対象者についてイメージしている」ものが35名(66.0%)であった。また、イメージしている対象者については「高齢者」が11名(31.4%)、「高齢者および障害者」が9名

(25.7%)、「介護を必要としている人」が5名(14.3%)、「生活に支障のある人」が5名(14.3%)、「身体に支障のある人」が3名(8.6%)などであった。そして、全15回の授業を受講し終えた後の回答では、「対象者についてイメージしていない」ものは19名(35.2%)、「対象者についてイメージしている」ものが34名(63.0%)であった。また、イメージしている対象者については、「高齢者」が15名(44.1%)、「利用者」が5名(14.7%)、「日常生活に支障のある人」が5名(14.7%)、「介護を必要としている人」「身体に支障のある人」「障

表3 受講終了後の介護福祉士のイメージに対する変化の有無

n=53

受講前のイメージから変化なし	15	28.3%
役割内容のまま変化なし	11	73.3%
業務に対する悪いイメージのまま変化なし	4	26.7%
受講前のイメージから変化あり	38	71.7%
役割内容が適正化した	23	60.5%
良いイメージとなった	5	13.2%
業務に対するイメージがさらに良いイメージになった	2	40.0%
役割内容が適正化され、資格に対し良いイメージとなった	1	20.0%
役割内容が適正化され、業務に対し良いイメージとなった	1	20.0%
資格に対する悪いイメージから、役割内容が良いイメージとなった	1	20.0%
悪いイメージとなった	10	26.3%
役割内容から業務内容に対し悪いイメージとなった	8	57.1%
役割内容は適正化されたが業務に対し悪いイメージとなった	2	14.3%
(悪いイメージ内容)	31	
肉体労働・重労働	10	32.3%
大変な仕事	6	19.4%
体力・精神的にきつい仕事	5	16.1%
給与が低い	5	16.1%
人手不足	3	9.7%
汚い	1	3.2%
上下関係がある	1	3.2%

害者」が各3名(8.8%)であった。

4. 介護福祉士のイメージに対する変化の有無について

全15回の授業を受講し終えた後の介護福祉士のイメージの変化の有無については表3に示す。「受講前のイメージから変化なし」は15名(28.3%)、「受講前のイメージから変化あり」は38名(71.7%)であった。イメージに変化があった内訳は、受講前にイメージしていた「役割内容が適正化された」ものが23名(60.5%)、「ポジティブイメージとなった」ものが5名(13.2%)、「ネガティブイメージとなった」ものが10名(26.3%)であった。ポジティブイメージに変化した内容としては、「業務に対するイメージがさらに良いイメージになった」などであった。反対に、ネガティブイメージに変化した内容としては、「肉体労働・重労働」、「大変な仕事」、「体力・精神的にきつい仕事」などであった。

5. 第1回の受講前の回答における

「介護福祉士」の仕事内容について

対象者の自由記述の内容から「『介護福祉士』の仕事内容」を分析した。記録単位数は81となり、51コード、25サブカテゴリで、【高齢者や障害者への生活支援】、【施設入居者への生活支援】、【生活が困難な人の支援】、【相談・調整】、【自立支援】、【精神的支援】、【日常生活の世話】、【限定的な仕事】の8つのカテゴリが抽出された(表4参照)

6. 全15回の受講後の回答における

「介護福祉士」の仕事内容について

対象者の自由記述の内容から「『介護福祉士』の仕事内容」を分析した。記録単位数は116となり、66コード、22サブカテゴリで、【日常生活をサポートする支援】、【施設や在宅の高齢者や障害ある人への介護】、【支援を必要とする人の状態を把握し、その人にあった自立支援をする】、【専門的知識や技術をもとに、利用者の支援を行う】、【専門的ケア】、【相談援助】、【指導

表4 「介護福祉士」の仕事内容について：受講前の回答

n=53

カテゴリ	小カテゴリ	コード	
高齢者や障害者への生活支援	高齢者や障害者など生活を送る上で支障のある人への生活の支援	高齢者や障害のある人、体の不自由な人に対し、食事や排せつ、入浴などの支援をする 介護を必要とする高齢者に対する食事や排せつなどの援助をする 生活を送る上で支障のある高齢者に対する食事や排せつなどの支援をする 体の不自由な人への食事や排せつ、入浴などの介助	6
	介護を必要とする高齢者を対象とした生活の支援	高齢者を対象とした生活介護 要介護者を対象とした介助	4
施設入居者への生活支援	高齢者や障害者など生活を送る上で支障のある人への生活を支える	高齢者や体の不自由な人を支える 一人で生活を送ることが困難な人を支える 高齢者や体の不自由な人の生活を支える	7
	施設に入居している利用者の生活の支援	施設入居者の食事や排せつ、入浴などの介助 利用者の食事や排せつ、入浴などの生活面の介助 施設に入居している高齢者の生活支援 施設に入居している高齢者の日常生活のサポート	3
生活が困難な人の支援	生活を送るための介助	入浴や食事の介助 生活を送るための介助 身の回りの介助	6
	直接的な支援	人に直接触れて支援をする	2
	要介護者の支援	介護を必要とする利用者の介護をする 介護を必要とする人の支援をする	3
	生活がしやすくなるための支援	生活しやすくなるための介助 生活できるようにするための支援 その人にあった支援を提供する	4
相談・調整	より良い生活のための相談をする	介護を必要とする利用者の生活をよくするための話し合いをする 望んでいる生活について相談をする	3
	ニーズに沿った介護計画を立案しサービス内容の調整をする	適切なサービスの利用がなされるよう調整する その人のニーズにそった計画を立案する	2
自立支援	自立に向けた支援	自立に向けた支援をする 要介護者が自立できるよう援助する	2
	リハビリの支援	リハビリを行う 体の不自由な人のリハビリを行う	3
	栄養管理	食事や栄養の管理をする	1
	健康への支援	健康的な生活が送れるよう支援する	1
精神的支援	コミュニケーションをとる	介護している家族とのコミュニケーションをとる 行事やイベントを通してコミュニケーションをとる	2
	精神的な支援を行う	高齢者の精神的な支援を行う 利用者の精神的な支援を行う	2
	介護者の相談対応	家族の相談に応じる	2
	介護者へアドバイスする	家族へアドバイスする 介護者へアドバイスする	3
日常生活の世話	体の不自由な人の生活を助ける	体が不自由な人を助ける 生活動作に支障があり生活を送ることが困難な人を助ける	3
	人の生活の手助けをする	入浴や食事の手助けをする	2
	面倒を見る	高齢者の面倒をみる	1
	施設に入居している利用者の身の回りの手伝いをする	施設に入居している高齢者の身の回りの世話をする 施設に入居している高齢者の食事、排泄、入浴などの手伝いをする	3
	身の回りの手伝いをする	生活を送ることが困難な人の排泄や食事、入浴の手伝いをする 自分一人で身の回りのことができない人の手伝いをする	3
限定的な仕事	施設や在宅において介護する仕事	施設で勤務する 施設や在宅で仕事する	3
	力を要する仕事	力のいる仕事 体力を要する仕事	2

表5 「介護福祉士」の仕事内容について：受講終了後の回答

n=53

カテゴリ	小カテゴリ	コード	
日常生活をサポートする支援	日常生活の支援をする	食事や排せつなどの身体介護と調理や洗濯などの生活支援 生活をサポートする 日常生活を支援する	14
	高齢者に対する生活の支援をする	高齢者の入浴・食事・排泄の介助をする 高齢者の身の回りのサポートをする 高齢者の体のケアをする 高齢者の日常生活を支援する 高齢者の介護	9
	施設に入居している高齢者の日常生活の支援	施設に入居している高齢者の入浴・食事・排泄の介護 施設に入所している高齢者の、その人に必要な支援を提供する 施設で日常生活の支援をする 施設に入居している人の生活のサポートをする	8
施設や在宅の高齢者や障害のある人への介護	施設や在宅における高齢者の介護をする	施設や在宅の高齢者の介護 施設介護や訪問介護 在宅においても支援活動を行う	8
	障害のある人へ介護する	身体に障害のある方への介護 身体及び精神に障害のある方の支援をする 障害の状況にあった支援をする	4
支援を必要とする人の状態を把握し、その人にあった自立支援をする	利用者を把握した上で生活をサポートする	利用者に沿ったケアを実施する 利用者の入浴・排泄・食事の身体介護をする 利用者の生活をサポートする 利用者の身体的な介護 利用者の生活が安定化するよう支援する	10
	介護を必要とする人を尊重し、ニーズを把握し生活の支援をする	1人で生活を送ることが困難な方への介助 生活に困っている方を介護し、生活を支援する 介護を必要とする方の身体介助や生活援助をする 介護を必要とする方の自己決定権を尊重し、その人が望む生活を支援する	7
	意欲を引き出し、自立に向けた支援をする	自立支援 生きる意欲を引き出す支援	5
	支援を必要としている人の問題解決に向けた支援をする	支援を必要としている人に身体介護や生活援助をする 生活しやすくなるようなケアをする その人にあった援助をする 問題解決に向けた支援をする	4
専門的知識や技術をもとに、利用者への支援を行う	コミュニケーションを取りながら、精神的サポートをする	コミュニケーションを通して精神的なケアを行う メンタルケアを行う 生活のサポートだけではなく、精神面への配慮が求められる 身体介護に加え、精神面も支える 相談助言を行う 状態を把握する	13
	専門的知識や技術を基に介護する	専門的な知識や技術で介護する	2
	利用者の状態を把握し、ニーズに沿った支援計画を立案する	利用者の希望にそったケアを行う 利用者の状態を把握し、ニーズに沿った支援を立案する	2
専門的ケア	地域に向けたイベントやレクリエーションの企画運営を行う	レクリエーションを考案し実施する 地域交流を図る 季節にあったイベントを準備する 施設の催事やイベントの企画運営	6
	健康管理をする	健康を管理する 食べやすい工夫や管理をする 高齢者の健康管理	4
	地域における居場所づくりを検討する	利用者の居場所づくりを行う 地域社会で生活を送れるよう考える	2
	介護予防を実施する	介護予防に取り組む	1
	医療的支援の実施	医療行為も実施する	1
相談援助	本人および家族の相談援助や指導を行う	日常生活に困難を抱えている人の相談援助を行う 介護の方針や指導など助言をする 家族に対する相談援助を行う 高齢者から話を聞き、助言する 家族から話を聞き、助言する	8
	生活に関する相談援助やアドバイスを行う	生活に関する相談や説明をする 高齢者の相談援助 利用者とは関係性の関係に配慮する	2
指導者としての役割	関係性づくり		1
	介護職員への指導	施設内の職員の取りまとめ 職員への指導や助言をする 介護事業所の責任者 施設の中の役割	4
重労働	体力的負担が大きい仕事	体力のいる仕事	1

者としての役割】、【重労働】の8つのカテゴリが抽出された(表5参照)

IV. 考察

本研究の目的は、社会福祉を専攻している学生が、介護福祉士についてどのようなイメージを持っているのか、仕事内容をどのように捉えているのかを明らかにすることであり、また、同時に介護福祉概論科目の履修後に介護福祉士のイメージや仕事内容について認識が変化するのも明らかにすることである。その結果、介護福祉概論科目を受講する前の学生の介護福祉士のイメージは、「高齢者」や「高齢者および障害者」に対し「支援する」「介護する」「介助する」ということであった。受講後の介護福祉士のイメージは、「高齢者」よりも、「利用者」「日常生活に支障のある人」「介護を必要とする人」「身体に支障のある人」に対し「生活を支援する」「介護する」といったことになり、高齢者だけではなく支援を必要としている人が対象であるという理解へ進んだといえる。さらに、「専門性」という捉え方で介護福祉士をイメージする傾向もみられた。

1. 介護福祉士のイメージに対する変化について

受講前と受講後に介護福祉士のイメージに対し回答を比較した結果、3割が変化せず、7割が変化した。変化しなかった3割のうち介護福祉士のイメージにおいてネガティブなイメージを抱いていたものは、受講後も変わらずネガティブなイメージのままであった。変化した7割については、そのうちの6割が受講前にイメージしていた介護福祉士の役割が修正・補足され適切な認識に変化した。しかしながら、3割が介護福祉士の役割について修正・補足され適切な認識に変化したものの、仕事内容についてはネガティブなイメージを抱く結果となった。ネガティブなイメージについては、「重労働である」「大変な仕事である」「体力および精神的にきつい仕事である」といったイメージとなった。なぜ仕事内容は適切に認識されたにも関わらず、ネガティブなイメージに変化したのか、その要因として考えられることは、日本の現状を説明する中で、高齢化の影響により、支

援を必要とする要介護者が急激に増加している現状であるにも関わらず、支援者である介護人材が不足していることばかりが強調されている点がイメージに影響を及ぼしたのではないかと考える。厚生労働省「介護サービス施設・事業所調査」⁸⁾によると、介護職員数は2000年では54.9万人であったが、2016年には183.3万人と3倍以上増加している。このことから、介護に従事する人材は年々増加傾向にある。現在は需要に対し、供給が追いついていない状況であり、介護に従事する人が減少している訳ではないことは明らかである。しかしながら、需要に対し介護人材が不足していることばかりが問題視されるため、「介護現場は人手が不足している」というイメージになり、「人手不足は介護現場が過酷だからではないか」、「大変だから介護を辞める人が多いのではないか」、「介護を辞めるのは給与が低いからではないか」といった、誤った情報から、ネガティブなイメージの定着に繋がってしまったのではないかと考える。

2. 介護福祉士の仕事内容に対する変化について

受講前と受講後に介護福祉士の仕事内容に対し回答を比較すると、受講前は、①高齢者や障害者への生活支援、②施設入居者への生活支援、③生活が困難な人の支援、④相談・調整、⑤自立支援、⑥精神的支援、⑦日常生活の世話、⑧限定的な仕事の8つにカテゴリ化された。受講後は、①日常生活をサポートする支援、②施設や在宅の高齢者や障害ある人への介護、③支援を必要とする人の状態を把握し、その人にあった自立支援をする、④専門的知識や技術をもとに、利用者の支援を行う、⑤専門的ケア、⑥相談援助、⑦指導者としての役割、⑧重労働の8つにカテゴリ化された。受講前は①高齢者や障害者への生活支援であったが、受講後は①日常生活をサポートする支援へと変化している。また、受講前の⑤自立支援について、受講後は③支援を必要とする人の状態を把握し、その人にあった自立支援をすると変化しており、どういう対象に対し、どういう目的で自立の支援をするのか理解したことが伺える。さらに受講前の⑥精神的支援については、受講後では④専門的知識や技術をもとに、利用者の支援を行

うと変化し、精神面を支援するためには、専門的な知識やコミュニケーション技術が必要であると認識できたと言える。さらに、受講後には、⑤専門的ケア、⑦指導者としての役割といったカテゴリが追加された。受講前から受講後において具体的かつ詳細な内容に変化しており、介護福祉士の専門性について理解できたことが伺える。介護福祉士の専門性について、公益社団法人日本介護福祉士会⁹⁾では、「利用者の生活をより良い方向へ変化させるために、根拠に基づいた介護の実践と共に、環境を整備することができる」と定義した上で、「①介護過程の展開による根拠に基づいた介護実践、②指導・育成、③環境の整備、多職種連携の3項目である」としている。介護福祉概論科目を通して、介護福祉士の専門性については理解が深まったものの、介護福祉士のイメージが変化することには繋がらないことが分かった。正しい認識になったとしても、定着しているイメージを払拭することは簡単ではないと言える。鶴巻¹⁰⁾によると、ネガティブなイメージをポジティブなイメージへと転換させる基本概念として、「現実感」「非現実感」「身体性」であり、「クリエイティブ」という認識がネガティブなイメージをポジティブなイメージへ転換する一つの契機であると報告している。これは、本来はネガティブなイメージ、マイナスのイメージのものにイメージの良いものを取り込むことでプラスに転換し、ポジティブに捉え直そうとする働きがあることを意味している。介護に対するネガティブなイメージは、様々な現場の認識とは違う間違った情報から創り出され、知らず知らずのうちにそのようなイメージが定着してしまった。定着してしまったネガティブなイメージを払拭するのは難しいことから、ネガティブなイメージに良いイメージのものを取り込み、プラスに転換しポジティブに捉え直す働きがけをしていくこともよいのではないかと考える。

V. 結論

介護福祉概論科目を受講する前の学生の介護福祉士のイメージは、高齢者や障害者に対し生活を支援・介護・介助するという抽象的な支援をするイメージであったが、受講後は、何らか

の理由により日常生活に支障のある人に対し、生活を支援・介護するといったイメージとなり、介護福祉士が支援する対象者は、高齢者だけではなく、支援を必要としている人が対象であるという理解へ進み、さらに「専門性」という捉え方で介護福祉士をイメージする傾向へ変わったことが明らかとなった。介護福祉概論科目を通して、介護福祉士の専門性について理解が深まったとしても、定着しているネガティブなイメージがポジティブなイメージに変化する傾向はあまり見られなかった。正しい認識になったとしても、定着しているイメージを払拭することは簡単ではないことが明らかとなった。今後は、ネガティブなイメージをどのようにポジティブなイメージに転換できるのが課題である。今後は、これまでとは違ったアプローチ方法として、ネガティブなイメージに良いイメージのものを取り込み、プラスに転換しポジティブに捉え直す働きがけを試みることは価値があるのではないかと考える。

【引用文献】

- 1) 厚生労働省 (2005) 「平成17年版厚生労働白書 地域とともに支えるこれからの社会保障」 <https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/05/dl/1-2a.pdf> (2022年9月29日閲覧)
- 2) 厚生労働省 (2015) 「2025年に向けた介護人材の確保～量と質の好循環の確立に向けて～」 https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu-Shakaihoshoutantou/0000075800_1.pdf (2022年9月29日閲覧)
- 3) 内閣府 (2010) 「介護保険制度に関する世論調査」 <https://survey.gov-online.go.jp/h22/h22-kaigohoken/index.html> (2022年9月29日閲覧)
- 4) 株式会社リクルートキャリア (2019) 「HELPMAN JAPAN 『介護職非従事者の意識調査』」 <https://www.recruit.co.jp/newsroom/recruitcareer/news/2019712.Pdf> (2022年9月29日閲覧)
- 5) 介護労働安定センター (2021) 「令和2年度『介護労働実態調査』」 http://www.kaigo-center.or.jp/report/pdf/2021r01_chousa_cw_kekka.pdf (2022年9月29日閲覧)
- 6) 林雅美 (2016) 「高校生の介護の仕事に対する

- イメージに与える要因」『介護福祉学』23（2），87-97
- 7) 津田理恵子（2010）「学生の介護職のイメージ～介護福祉実習体験の違いによる意識の比較～」『厚生指標』57（8），27-32
- 8) 厚生労働省（2019）「介護サービス施設・事業所調査」
<https://www.mhlw.go.jp/content/12602000/000489026.pdf>（2022年9月29日閲覧）
- 9) 公益社団法人日本介護福祉士会ホームページ「介護福祉士の専門性」<https://www.jaccw.or.jp/about/fukushishi/senmon>（最終閲覧日2022年10月1日）
- 10) 鶴巻史子（2016）「ネガティブなイメージをポジティブなイメージに転換する基本概念と契機に関する研究—髪を用いた作品を対象とした両義的なイメージに着目して—」『芸術工学会誌』71（30），74-81